

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：24405

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13463

研究課題名（和文）エチオピアにおける伝統的政治体系の再興を巡る言説と実践に関する社会人類学的研究

研究課題名（英文）The Revival Movement of a Traditional Socio-Political System among the Arsi in South-Eastern Ethiopia: Focusing on Narratives and Practices of the Gadaa

研究代表者

大場 千景（Oba-Smidt, Chikage）

大阪公立大学・大学院現代システム科学研究科 ・客員研究員

研究者番号：90637688

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1)エチオピアのアルシ社会において伝統的政治体系であるガダが如何なるものであり、現在どのようなガダの実践を行われているか、また、2)現在の政治的背景のもとでいかにして、19世紀後半から解体されていったガダを再構築しているのか、を明らかにした。1)について、ガダの社会的な役割は統治と儀礼にあるが、その儀礼的要素は消失する一方で、その政治構造を残しつつ、慣習法廷での裁定がガダの実践として継承されていた。2)については、アルシの人々は、ガダの再興運動の中で、ガダの構造を換骨奪胎させながら、その構造を再創造させつつ、多様な言説を駆使させながら、ガダの権力をめぐる闘争を行っていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文化人類学の分野で伝統的政治システムに関する研究がおこなわれてきたが、多くの社会学者たちは、伝統的政治システムは、いずれ国民国家の成立とともに消えゆくものであると考えてきた。しかしながら、本研究が焦点をあてたアルシの事例にあるように、伝統的社会構造は現代的コンテクストを組み込みつつ、再解釈、再構築されながら、人々の間で実践され続けていた。本研究の成果の学術的意義とは、これまで取り上げられてこなかった統治にかかわる新しい現象について取り上げ、人間の政治的営みに関する厚い記述と記録を行ったことである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify 1) what the traditional political system called Gada is at Arsi society in Ethiopia, what kind of practice of Gada is currently practiced, and 2) how it is being reconstructed and revitalized in the current political context. Regarding 1), the social role of the Gada is governance and ritual, but while the ritual element has disappeared, the customary courts has been inherited as the practice of gadaa, while the political structure has been retained. As for 2), the Arsi, in the movement for the revival of Gada, were engaged in power struggles for positions in Gada while recreating the structure of Gada with making full use of various discourses.

研究分野：社会人類学

キーワード：ガダ・システム 伝統的政治システムの再興運動 慣習法廷 伝統の創出 儀礼の喪失 アルシ・オロモ

1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とする年齢階梯によって編成されるガダとよばれる社会・政治組織は、エチオピアにおける最大民族であるオロモ語系諸集団に共通に実践されてきた。その主要な社会的役割は、統治と儀礼の執行にある。

ガダの年齢階梯は、11 階梯あり、それぞれの階梯において行うべき通過儀礼や社会内部での役割が決っている。各階梯では、世代組が組織され、通過儀礼を行いながら、8年に一度の間隔で階梯を変更していく。第6番目のガダ階梯に属する世代組が社会全体の統治に責任をもつ。また、過去から現在にいたるまで無数に存在してきた世代組集団間には、親子関係が概念的に付与されており、その概念に従って5つの理想的リネージ集団が編制されている。個人は、世代組に属する際、彼自身のリネージが代々属してきたこの「5つの理想的リネージ集団」の系譜に属する世代組に所属しなければならない。これが、ガダを実践してきたオロモ語系諸集団のなかでも、とくに国内外の人類学者によってガダ研究が盛んにおこなわれたボラナ・オロモのガダの在り方から抽出されたガダの基本構造である。他のオロモ語系諸集団においてもこの基本構造は共通してみられる。

19世紀後半から始まるエチオピア帝国による各地の征服や支配によってこの伝統的政治体系は解体の危機にさらされていった。しかしながら、2000年代からガダの再評価が起こり始め、オロモ語系諸集団内部で再興運動が活発化していった。本研究は、現代的なコンテキストをうけて巻き起こっているこの新しい政治的文化的現象を明らかにすべく、アルシ・オロモのガダとその再興運動に焦点をあてた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、エチオピア南東部に居住するアルシの人々において19世紀後半から解体していったガダと呼ばれる政治体系に関する知識や実践がいかなるものであり、現在どのようなガダの実践が行われているのか、また、②現在の政治的社会的コンテキストのもとで人々がいかにして、ガダを再構築し、再生しようとしているのか、を明らかにすることに焦点があてられた。

3. 研究の方法

目的①に対する方法：20世紀以前のガダが如何なるものであったのかについて明らかにするために、ガダの実践が行われているオロミア州アルシ西県ドラ地域を対象として、ガダの役職者を中心にガダに関する伝承、記憶、知識、経験に関する聞き取りを行った。また実際のガダの在り方を明らかにするために、現在行われているガダの実践の一つであるガダの役職者たちが中心になって行う慣習法廷での観察と映像記録を行った。

目的②に対する方法：ガダの再興が具体的にどのような仕方で進められているのかについて明らかにするために、アルシ居住地域で開かれた複数のガダの再興に関する会議において、その観察と聞き取り、および会議でのすべての議論に関する録音及び映像記録を行った。

これらのデータを使って、アルシの人々の語りや行為の中に内在するガダに関する言説や認識とその実践の在り方を浮き彫りにしていった。

4. 研究成果

目的①に対する成果：アルシにおいては、1)ビルマジ、2)ブルトゥマ、3)ホラタ、4)バハラ、5)ローバレ、と名付けられた世代組集団が存在し、アルシの人々は、いずれかの集団に属してきた。この場合、個人は、彼自身のリネージが代々属してきたこれらの5つの世代組集団

の一つに所属しなければならない。例えば、ある個人の父や祖父がビルマジの先代、先々代の世代組に属していた場合、彼や彼の子供たちもまた現世代、次世代のビルマジの世代組に属することになる。

彼らが共有しているガダに関する知識は、これらの5つの世代組集団が、上記の順番で回帰しつつ、階梯を変更しながら、通過儀礼や社会的役割を果たしてきたとする。そして、各世代組集団では、ガダのリーダーである、ボク（Boku）やホーカ（Hooka）が世襲的に選出され、そこに、サデータ（Sadeeta）とよばれるクランのリーダーたちが参与し、社会全体の重要な意思決定を任されてきたと語る。アルシでは、各地域においてこうした5つの世代組を中心とするガダ組織共同体（Dhadhacha）が編成され、それぞれ統治するテリトリーをもってきたとされ、その数は20地域として人々によって認識されている。

ただ、この20のガダ組織共同体のテリトリーの範囲や名前に関する記憶や知識の有無や共有度には地域的な偏差があった。パーレ県の人々においては、その知識はほとんどなく、アルシ西県においても、ガダ組織共同体の全体の数に関する口頭伝承の聞き取りをおこなったが、近隣のガダ組織共同体に関して言及できたものの、自分達の地域から離れているところにあるガダ組織共同体に関して語るができる古老はいなかった。従って、20という数が口頭伝承の中で人々によって共有されていたわけではなく、おそらく近年のガダ再興運動の中で、恣意的に語られ始めた可能性は高い。

現在において、ガダ組織共同体に関する知識、記憶、実践を保持している地域は極めてすくなくなくなり、筆者が調査の中でそのテリトリーの範囲と名称、ガダに関する知識、記憶、実践が確認できたのは、オロミア州アルシ西県全域、シャワ県やアルシ東県の一部の地域においてであった。とくに、アルシ西県には、5つのガダ組織共同体が記憶され、現在でもガダの実践が行われており、本研究では、そのうちでコーラ・ガダ組織共同体において詳しく、ガダの知識や実践に関する観察及び聞き取りを行った（地図1）。

ガダの役職者たちの系譜や歴史記憶に基づくと、コーラ・ガダ組織共同体の成立は、17世紀にさかのぼることができる。1880年代にはじまるエチオピア帝国によるアルシ征服によって、その抵抗の母体となったアルシ各地のガダ組織共同体は帝国の攻撃対象となり、多くの場合解体の危機に瀕した。コーラ・ガダ組織共同体においては、帝国の支配から隠れるようにして密かにその統治と儀礼の実践をおこなってきた。しかしながら、コーラ・ガダ組織共同体においても、現在、イスラームの浸透とともに、ガダに関わる儀礼が行われなくなり、それにより、ガダの基本構造ともいえる儀礼に基づく年齢階梯の体系が崩れていた。ガダが年齢階梯を基盤とする社会組織であるという認識すらも人々の間で偏差があった。

その一方で、1)ビルマジ、2)ブルトゥマ、3)ホラタ、4)バハラ、5)ローバレ、と名付けられたかつての5つの世代組の名は依然として共有され、この5つの集団とその集団内部で役職を担ってきたリーダーたちを中心にガダ組織共同体が再構築されていた。コーラ・ガダ組織共同体においては、22のクランとその居住地域が統治のテリトリーとなっており、5つの世代組集団は、それぞれ上述したように、ボク、ホーカ及びサデータ、さらに同一世代組の成員によって構成されていた。この5つの世代組集団が寄り集まる場合は、ボクのヤー（Ya'aa-Bokuu）とよばれ、そこでガダの役職者たちは、ガダ組織共同体内部の意思決定や係争問題の裁定を行っていた（表1）。これが、アルシにおいて現在においても実践されているガダの構造とその在り方である。



1 ビルマジ の世代組	2 プルトゥマ の世代組	3 ホラタ の世代組	4 バヒラ の世代組	5 ローバレ の世代組
1 世代組の長 (Boku)	1 世代組の長 (Boku)	1 世代組の長 (Boku)	1 世代組の長 (Boku)	1 世代組の長 (Boku)
2 世代組の副長 (Hooka)	2 世代組の副長 (Hooka)	2 世代組の副長 (Hooka)	2 世代組の副長 (Hooka)	2 世代組の副長 (Hooka)
3 クランの役職者 (Sadeeta-fixee)	3 クランの役職者 (Sadeeta-fixee)	3 クランの役職者 (Sadeeta-fixee)	3 クランの役職者 (Sadeeta-fixee)	3 クランの役職者 (Sadeeta-fixee)
4 クランの役職者 (Sadeeta-gosa)	4 クランの役職者 (Sadeeta-gosa)	4 クランの役職者 (Sadeeta-gosa)	4 クランの役職者 (Sadeeta-gosa)	4 クランの役職者 (Sadeeta-gosa)

地図 1 (左) 表 1 (右) コーラ・ガダ組織共同体における 5 つの世代組とそのリーダー構成

現在、コーラ・ガダ組織共同体のテリトリーでは、3つの地域 (Hoolio, Damma, Ballo) で、それぞれ係争問題の裁定を行うために 2 週間に一度の間隔でボクのヤーの慣習法廷が開かれている。筆者はバウ口の地で開かれる慣習法廷において 2021 年から 2024 年に至る約 3 年間に断続的に観察と映像記録をおこなったが、ボクのヤーの慣習法廷では、地域全体に関する意思決定やアルシの慣習法に従って、窃盗、傷害、婚姻問題、器物損壊などの係争問題が、独自の裁定技法が用いられながら処理されていた。

コーラ・ガダ組織共同体は、政治的コンテクストを受けて、再構築されながら、存続してきたが、現在、ガダとイスラームの生み出す価値の対立は深刻化の一途をたどっており、アルシ社会内部に大きな亀裂を生んでいる。そのことが、ガダの実践の一つであるガダの慣習法廷やリーダーの社会的位置づけにも大きな影響をあたえている。

目的②に対する成果：アルシにおけるガダの再興運動は、2018 年から Covid19 の世界的流行やエチオピアでの内戦がはじまる 2020 年までの 2 年間において特に活発な動きが各地でみられた。その動きに関する詳しい分析に関しては、「アルシ・ディレンマ：エチオピア・アルシ社会におけるガダ再興運動が生み出す抗争と創造」として『文化人類学』において出版した。ここでは、2018 年から 2023 年までのガダ再興運動の動きを概観したい。

2018 年 4 月 5 日において、オロミア州パーレ県北部のオダ・ローバの地において、オロミア州文化観光局と地元の古老が共同で大規模なガダ再興のための大会議を開いた。アルシの各地域から老若男女が集まり、3 つの点が話し合われた。第一に、現在 (2018 年時点) においてガダ階梯にあるのは、プルトゥマの世代組であるとの知識の共有がなされた。第二に、パーレ地域における 5 つの世代組集団の代表者が選ばれた。第三に、パーレの人々は、自分が属すべき世代組を知らない人が大部分なので、彼らをいかに 5 つの世代組集団のいずれかに属させるかに関する方途を創造しながら、世代組集団の再構築が試みられていた。

この会議において、アルシの居住地域の西部 (アルシ西県と東県)、東部 (パーレ県) におけるガダの知識の偏差が現れていた。アルシ居住地域西部の方は比較的ガダに関する知識が古老世代を中心に共有されているのに対し、東部地域においては、ほとんど共有されていなかった。このことが、両者の対話を難しくし、ガダの再興運動の大きな障壁となっていった。

この大会議以降から 2019 年にかけて、アルシの各地域において土地の古老による複数のガダ再興に関する会議が開かれた。筆者は、そのうち、パーレ県北部 (ライトウ・ガルビ、サウエナ)、パーレ県西部 (ワラシェ) やアルシ西県 (セーロフタ、シェシエマネ、アダツバ) において、ガダの再興に関する会議の観察と記録を行った。そのいずれの会議の主題も、その地域のガダのリーダーは誰になるのか? という問題に関わるものであり、ガダの権力をめぐって、人々の間で闘争が起こっていた。その背後で、人々のガダの知識があいまいなことを利用して、事実を捏造し

たり、人々を扇動したりする古老たちが暗躍していた。

一方、オロミア州文化観光局やその支部もまた、地域の古老を招集しながら、アセラ、シャシャマネ、パーレ・ローベにおいて複数の会議を開いた。筆者はそのうち、アセラとパーレ・ローベで2回ずつ開かれた会議での観察と記録を行った。議題はアルシのガダとはいかなるものなのかという知識の共有と、ガダをいかにして再興すべきかという点に集中していた。会議の中で、パーレ県、アルシ西県と東県においてそれぞれガダに関する知識をもち、地域のまとめ役になりえる古老を3人ずつ選出し、彼らがガダの再興を指揮するという方式が採用された。選出された古老たちがそれぞれの県に存在するガダ組織共同体を同定し、それぞれの共同体において5つの世代組集団を再構築し、さらに各世代組集団の中でガダの役職者を選出するという役割を担うという計画である。議論のなかで、ガダが年齢階梯制度を基盤にしているという点は度外視され、5つの世代組を5つの「政党」とし、この5つの集団が、上述した回帰的順番で8年に一度の間隔で「政権」を担うという、ガダ組織に対する現代的再解釈が行われていた。

Covid19 とエチオピアの内戦の影響で、ガダの再興運動は、2020年から2022年にかけて大きな動きを見せなかったが、2023年において、古老たちによって、パーレ県北部ベルト地域でその地域のガダのリーダーに関する話し合いがなされた。また、2019年の文化観光局主催の各会議において、各県からガダの再興を指揮する古老を選出するという話合いが帰結していたが、2023年には、各県から選ぶ古老の数を3人から8人に増やし、さらに、県レベルだけでなく、市や町村レベルの行政区分ごとに8人ずつ古老を選ぶべきとの話し合いがなされ、その決定に従って、アルシが居住している全県の県、市、町村ごとに8人の古老たちが選出された。文化観光局の目論見としては、この選出された古老たちを再びオダ・ローバの地に集結させて、ガダの再興に関する大会議を開く予定が2023年の3月にあったが、延期された。この大会議は、いまだに実現されていない。

こうした一連の政府系のガダ再興会議の問題点は、招集されている人々の質が深く吟味されることなく、行き当たりばったりに会議がなされている点である。アルシ内部で物知りとして知られている古老だけではなく、これまでガダの役職者を担ってきたリネージの成員や、若者層や女性が不在のまま、会議が進んできている。政府主催のガダ再興会議に参加することは、ガダの再興において発言力をもつだけでなく、政府から支給される日当も得られる。このため、古老たちは、会議の開催やその内容に関する情報の隠蔽や独占をおこなう傾向がある。このことが、アルシにおけるガダ再興の新しい障壁を生んでいる。

アルシにおけるガダの再興運動はいまだ、途上である。アルシのガダ再興をめぐる障壁は無数に存在する。第一に、アルシ社会に全体的にみられるガダの知識と実践の欠如、第二に、イスラームと伝統的文化との競合関係、それに伴う通過儀礼の消失によるガダの基本構造であった年齢階梯体系の崩壊、さらには、世代組組織の形骸化、第三に、ガダの権力をめぐる闘争、特にそれは、古老間で強く見られ、彼らは自らの権力的立場を維持するためにガダの次世代を担う若者層をガダの再興運動から疎外している。第四に、アルシ社会全体が一枚岩ではなく、価値観や世界観が多様化し、ガダを民衆が希求しているかどうか、そもそもこの運動において不問に付されている点である。

アルシ社会におけるガダやその再興をめぐる動きは、今後もこの社会の内面をあぶりだしていくだろう。この運動の帰結がどのようなものを生んでいくのか、筆者は、さらなる調査をおこなっていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大場千景	4. 巻 101
2. 論文標題 口頭年代史の生成/継承とガダ政治体系との相関関係	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 49 - 66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大場千景	4. 巻 86
2. 論文標題 アルシ・ディレンマ:エチオピア・アルシ社会におけるガダ再興運動が生み出す抗争と創造	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『文化人類学』	6. 最初と最後の頁 5 - 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.86.1_005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 大場千景
2. 発表標題 The Methods of Arbitration in Gadaa Systems: Based on Comparative study in Gadaa Customary Courts between Arsi-Gadaa system and Boorana-Gadaa system
3. 学会等名 the fifth International Conference of Oromo Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年 ~ 2023年

1. 発表者名 大場千景
2. 発表標題 The Roles, Values and Norms of Gadaa System in Modern Justice
3. 学会等名 Oromia Justice Sector Professionals Training and Legal Research Institute (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大場千景
2. 発表標題 How Social Problems and Conflicts are Solved in Gadaa System?
3. 学会等名 Oromia Justice Sector Professionals Training and Legal Research Institute (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大場千景
2. 発表標題 The Role of Historical Memories in Transfer of power
3. 学会等名 The First Special International Research Conference on “Gadaa System and Its Contribution to Peace and Nation Building in Africa’s Quest for Renaissance”, Bule Hora University (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大場千景
2. 発表標題 The Gadaa Revival Movement : Analysis of a Case of Political Struggle in the Koola Gadaa Assembly, Western Arsi region
3. 学会等名 第4回国際オロモ学会(国立ジンマ大学) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大場千景
2. 発表標題 Luba as Institution of Regional Governance beyond Clan System
3. 学会等名 第1回国際オロモ学会(国立アルシ大学) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------